

# 麦作情報 第1号

J A む な か た  
北筑前普及指導センター

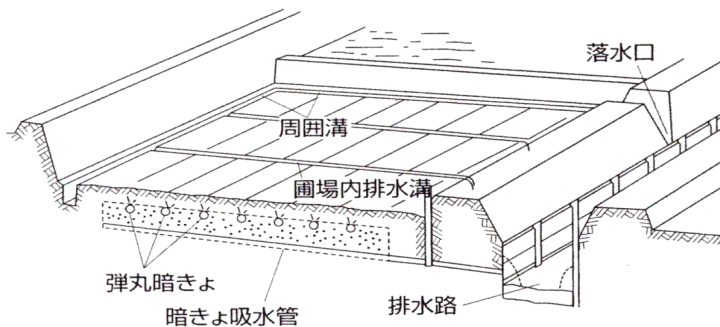
もうすぐ麦の播種時期です。播種前に排水対策や土づくり、雑草対策を行いましょ  
う。7年産麦も、「基本技術の励行」を合言葉に、部会員全員で収量及び品質の向上  
に取り組みましょう。

## 1 播種前の排水対策と土づくり

### (1) 排水対策（地表排水と地下排水の組み合わせ）

排水はその6割が地表排水によるものと言われています。以下の点に注意して  
排水対策を行いましょ。

- ① 地表排水は、周囲溝（額縁排水）と、うね溝（ほ場内排水溝）が基本。
- ② 地下排水は、本暗渠の施工が基本で、補助として弾丸暗渠や心土破碎  
（サブソイラ等）を施工。



みぞをつないで落水口  
から排水させることが  
重要

### (2) 土壌の酸度矯正

麦は酸性土壌を嫌います。適正な土壌のpHは、6.0~6.5です。特に、大麦は  
pH5.5以下で生育障害が発生します。pHが低い場合は、石灰やミネラルG等の  
土壌改良剤の散布を行ってください。

### (3) 有機物の施用

- ① 稲わらは焼却せずに全量すき込みましょ。
- ② 家畜ふん尿処理物は、地力向上効果だけでなく肥料的効果があります。  
畜種・処理方法により性状が異なるため、施用には注意ましょ。

## 2 施肥（基肥）

いずれの麦類も基肥はベスト化成444を40kg/10a 施用ましょ。

※大豆後作の麦については、倒伏防止のため基肥は基準量より減らし、  
20~30kg/10a程度にましょ。

※大麦の不稔が発生したほ場で、ホウ素欠乏による場合はFTEを4kg/10a  
施用ましょ。

（穂全体や、穂の上部が不稔になるのが特徴で、前作大豆のほ場が多い。）

### 3 播種

※適期内に播種を終えるようにしましょう。

- (1) 播種適期：小麦 11月20日～11月30日（晩播限界12/15）  
 大麦 11月25日～12月5日（晩播限界12/20）

特に、大麦の早播きは側面裂皮による外観品質の低下と出穂期の低温による不稔粒の発生を招く恐れがあるので、早播きを避け適期播種に努めましょう。

- (2) 播種量（10aあたり）

品種名	11/15～20	11/20～25	11/25～30	12/1～10
はるさやか	—	5～6kg	6～7kg	8～10kg
チクゴイズミ ちくしW2号	5～6kg		6～7kg	12/1～5 8～9kg

- (3) 種子消毒：トリフミン水和剤0.5%粉衣（種子10kgに薬剤50g）

※小麦でシロトビムシ類による被害が予想されるほ場（大豆後作、低温多湿、遅播）は、トリフミン水和剤0.5%粉衣に加えて、アドマイヤー水和剤0.15%粉衣（種子10kgに薬剤15g）の2剤混用で消毒を行いましょう。

### 4 雑草防除（10aあたり）

除草剤名	薬量	散布液量	使用時期
ムギレンジャー乳剤	300～600ml	50～100ℓ	播種後～出芽前 （雑草発生前まで）
ボクサー	400～500ml	70～100ℓ	播種後～麦2葉期まで
リベレーターフロアブル	60～80ml	100ℓ	播種後～麦3葉期まで
《上記各薬剤に混用》 トレファノサイド乳剤	200～300ml	100ℓ	播種後～生育期 （雑草発生前） （但し、収穫45日前まで）

◎タデ科(ミチャナギ)が多いほ場では、上記の各薬剤にトレファノサイド乳剤を混用し、散布しましょう。

【ミチャナギ】右写真



冬から春にかけて出芽し、花は緑白色。麦群落内では茎に寄りかかり立ち上がる。

#### 《注意事項》

※散布の際、土壤が乾き過ぎている場合や土塊が大きい場合は、散布液量を登録の範囲内で多くした方が、効果が安定します。

※播種前雑草が多いほ場では、ラウンドアップマックスロードまたはプリグロックスLを農薬使用基準に従って散布しましょう。

※ボクサーは、麦2葉期まで使用できる登録となっておりますが、麦の播種後、早めに散布した方が効果は高くなります。

※リベレーターフロアブルは、特に砂壤土・壤土の場合は薬害が出やすいため、登録の範囲内で薬量を減らしましょう。